



北欧の福祉 上

広島県生活協同組合連合会主催の視察に同行し、秋深まるスウェーデンとデンマークを訪れた。両国とも消費税25%。国民の税負担は大きい一方、その人らしく生きることを社会で支える精神が根付いていた。人や環境を大切に暮らしを目指す北欧の試みを「福祉編」「環境編」に分けて報告する。

(平井敦子)



デンマーク・オーデンセ市の高齢者住宅、アルバーニ・プライエセンタール。軽度の認知症のエミリア・ハンズンさん(91)は、自室の窓辺のいすに腰掛け、読書を楽しんでいた。「この生活は快適よ」。こぼれんばかりの笑顔で語る。

「だって彼女は何だっ

だもの」と、介護実習生ニナ・フレイクスさん(22)が説明する。好きな時間に起きて着替え、食べたいときに食べる。その日の気分でシャワーを浴びるかどうかを決め、眠くなったら寝る。自宅にいるのと同じリズム。そのほとんどを自分でこなす。

アパートの感覚

センター長のヘレ・ア

<高齢者住宅>

デンマークもスウェーデンも施設から住宅へ、介護の場の位置付けを切り替えている。

デンマークには市町村が介護判定して入居を決定し、24時間体制でケアをするプライエボリーのほか、軽度の要介護者が暮らすエルダーボリーがある。いずれもトイレ、シャワー、ミニキッチン付きの個室を備える。

スウェーデンも、1992年から、療養病床のようなナーシングホームや認知症のグループホームなど従来の介護医療施設の区分をなくし、「高齢者特別住居」に統一した。「エーデル改革」と呼ばれる。

両国ともこうした住宅に入居すれば、介護度が変わっても転居させられることはなく「ついのすみか」となっている。

施設から住宅へ

自室で読書を楽しんでいたハンズンさん。毎日化粧をほどこしているせいか、顔色はとてもよく見えた(いずれもデンマーク・オーデンセ市のアルバーニ・プライエセンター)

大半認知症 寝たきりゼロ

デンセルセンさんは「ここは施設ではなくて住宅。住民が街中のアパートに部屋を借りているのと同じです。彼女たちは施設に入ったんじゃない」と説明する。

人口19万人のオーデンセ市。65歳以上の2万8千人のうち認知症の人は3千人。市は26力所1400戸の高齢者住宅(フライエボリー)を整備し、自宅での生活が難しくなった高齢者を支えている。アルバーニ・プライエセンターもその一つだ。日本で言えば、特別養護老人ホーム、老人保健施設、認知症のグループホームの入所者らが対象ということになる。1987年の高齢者住宅法により、日本の特別養護老人ホームに当たる「プライエム」の建設を中止したデンマーク。施設から住宅へと大きくかじを切った。根底にある考え方が「高齢者福祉の3原則」だ。住み慣れた環境を維持する「生活の継続性」▽老後の暮らし方を自分で決める「自己決定の尊重」▽自分でできることは最期まで自分で行う「残存能力の活用」。その人らしく生きるための福祉を目指し、入居者をルールで縛りがちな施設から脱皮しようとする努力が続けてきた。

自宅と同じ生活リズム

ダイニングでくつろぐ入居者の女性。ヘルパーのフレイクスさんが日本のおみやげの箸について説明するととても喜んだ



アルバーニでは、60代、90代の計35人が、五つのユニットに7人ずつ分かれて暮らす。9割が女性で、8割の人に認知症があるが、寝たきりの人はいない。入居者たちは毎日洋服に着替え、起き上がって生活している。

生きている実感

その暮らしを支えるケアの考え方も徹底している。市高齢者障害者福祉課のインゲ・トロープさんは「何でもやってあげてしまおうのは違う」と言い切る。

例えば、洗濯ものを干して取り入れる作業。ヘルパーがやってしまえばすぐに終わることも、高齢者自身がゆっくりと取り組めるよう支える。

トロープさんは強調する。「生活の中のどの部分はできて、続けていきたいのか。本人に決めてもらい実践してもらおう。自分の生活を持続できることが、その人が生きている実感につながる」。</p>
</div>





北欧の福祉①

スウェーデン・ウストオーケシヨ市のエーネバッケン高齢者特別住居の1階には遺体安置室と家族らが故人をしのぶ部屋がある。「亡くなった方はここに運びます」。最高責任者マルギット・マキタローさんは、入居者のほとんどが、この住居で亡くなると説明する。

胃ろうほとんど選択せず

会調べ」と推計されている。しかし、胃ろうをする。亡くなる時にも高齢者施設から病院へ運ばれ、さまざまな処置を受けるケースが少なくない。国民の8割が病院でみとられているのが実情だ。

リスク十分説明

しかし、スウェーデンとデンマークで訪れた高齢者住宅4カ所では全て、その住宅で入居者の最期をみとっていた。デンマーク・オーデンセ市の高齢者住宅、ルツターカセアン・フライエセンター。60〜90代の62人が7〜12人ごとのユニットに分かれて暮らして

いる。しかし、胃ろうをしている人は1人だけ。ほとんどが自分の部屋で亡くなる。

センター長のローン・ハイさんは「私たちは家庭医とともに、食べられなくなつて亡くなるリスクも家族にしっかりと説明します。でも、胃ろうをしてまで長生きしたくないという人が多い」と説明する。



遺体安置室の隣にある部屋。住宅で亡くなった高齢者の家族や友人が集まり、故人をしのぶ

本人意思最期まで尊重

3階建ての住宅に暮らすのは70〜90代の認知症の高齢者ら108人。1ユニット9人ずつに分かれ、それぞれ自分の部屋がある。



「私たちは本人が食事や薬を拒否したら、それは『死にたい』という意思表示と捉えます。無理に食べさせたり、体に負担をかけて延命処置をしたりしない。それも本人の『自己決定』の一つなんです」とマキタローさんは語る。

日本では胃ろうを付けている人が約26万人(2010年、全日本病院協

みとりの風景

職員と踊るのは車いすから立ち上がった女性。赤い介護用のベルトを使ってもらいながらリズムを刻んだ(いずれもスウェーデン・ウストオーケシヨ市のエーネバッケン高齢者特別住居)



という意識がすごく強い」と感じている。「たとえ健康面のリスクが高くなつても、自分らしく生きることを第一に優先する人が多いようです」

人生楽しむ権利

最期まで自分らしく。スウェーデンのエーネバッケン高齢者特別住居では「生を支える。週2回のダンスタイムは入居者たちが顔を輝かせるひとときだ。車いすの90代の女性も立ち上がる。少しふらつきながらも、介護用のベルトで職員に支えてもらって踊る。

踊りたい気持ちにできる限りの寄り添うのが北欧流だ。マキタローさんは「認知症であっても、私たちは個人の動作を制限しません」と力を込める。「誰にも人生を楽しむ権利がある。そのためには最期まで、本人の意思を尊重すべきでしょう」

(平井敦子)

<医療制度>

デンマークでは国民は一人一人、生まれたときから自分の家庭医を決め、病気やけがのときには、まず家庭医を受診する。家庭医は診断後、必要に応じて専門の病院を紹介する。

ただ、提供されるサービスは日本とは趣が異なるようだ。通訳の大加瀬恭子さんは、39度の熱が出て受診したときも薬をもらえず「家でゆっくり休みなさい」と優しく指示されたという。「自然に治るものは自然に治すとの考え方が国民にも浸透している。税金が高い分、治療も必要な人に必要な分だけ行うとの価値観が根付いているようです」と話す。



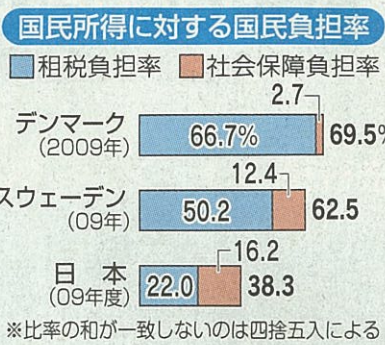
北欧の福祉

日本では消費税の増税に不安の声が上がる。現行の税率5%を2014年4月に8%、15年10月に10%に引き上げる予定だ。一方、スウェーデンもデンマークも25%。人々は、税負担を重く感じていないのだろうか。スウェーデンのバス運転手、シエル・フラットさん(57)は長女、長男が独立し、妻を亡くして今は一人暮らしだ。月給は2万4千格(約28万8千円)。そのうち46%が所得税などで引かれ、手取りは約15万5千円になる。

日本の財務省によると、国民所得に対する税や社会保障費の国民負担率(09年)は、スウェーデンが62.5%。デンマークも69.5%で、日本の38.3%とは大きな開きがある。

医療や介護保障 それでもフラットさん

「困ってないよ。だって、いざというときの保障がある。税金を払っても、代わりに返ってくるものがある」。教育費は大学まで無料で、医療費も最後の介護費もかからない。「僕は自分のことができなくなったら、ちゅうちょなく高齢者住宅に入るつもり。安心だからね」と語る。



国民の幸福度ランキング

1位	デンマーク
2位	スイス
3位	オーストリア
4位	アイスランド
5位	バハマ
6位	フィンランド
7位	スウェーデン
8位	ブータン
9位	ブルネイ
10位	カナダ
...	...
23位	米 国
82位	中 国
90位	日 本



デンマークの首都コペンハーゲンの旧証券取引所の前を歩き交う人々。税負担が大きくとも今の公共サービスを維持してほしいとの声が根強いという

高サービスマン 恩恵に納得

負担の受け止め

センター長のヘレ・アンデルセンさんは「収入によって受けるサービスに違いがあつてはならない」と強調。「必要なサービスは必ず受けられる。それがデンマークが幸福な国と言われるゆえんでしょう」と胸を張る。

2006年にレスタール大(英国)が示した国民の幸福度ランキングでは、デンマークが1位、スウェーデンは7位、日本は90位に甘んじている。

アンデルセンさんは「私たちは税金を一方的に払っている訳じゃない。その分だけ、福祉、医療、教育など自分や家族が恩恵を受けられる。超える。スウェーデンのバス運転手フラットさんはこうも話していた。「選挙には必ず行くよ。自分たちの生活や将来がかかっているからね」」

「政府に対する信頼感 投票率80%超す」

(平井敦子)

「自分のため」政治に関心

だが、収入と財産に応じて国が援助してくれる。日本の特別養護老人ホームは待機者が多く、入るまでに何年もかかる課題があるが、デンマークの高齢者住宅は2、3カ月で入居できるという。

「私たちが税金を一方的に払っている訳じゃない。その分だけ、福祉、医療、教育など自分や家族が恩恵を受けられる。超える。スウェーデンのバス運転手フラットさんはこうも話していた。「選挙には必ず行くよ。自分たちの生活や将来がかかっているからね」」

<介護職>

日本では介護現場での人材不足が大きな課題になっているが、スウェーデンやデンマークでは困っていないという。違うのは給与のようだ。

デンマークのアルバーニ・プライエセンターで働くヘルパーと社会保健介護福祉士の月給は2万2千〜2万8千格(30万8千〜39万2千円)。日本の介護職の平均は21万6千円で大きな開きがある。

一方、教育制度も異なる。デンマークではヘルパーになるには学校に14カ月通って学び、資格を取らなければならない。社会保健介護福祉士になるにはさらに18カ月のプログラムをこなす必要がある。ただ社会人になってからの教育も無料で、勉強のための費用はかからない。



デンマークの環境

シュン、シュン…。高さ約40メートルの風車の下に立つと、羽根が風を切る音が振動とともに伝わってくる。デンマークの東南にあるロラン島。庄原市とほぼ同じ1240平方

「この島では、島の6万5千人が使う電力の6倍を風力でつくりだし、周辺の地域や国外へも輸出している」とロラン市の市議レオ・クリステンセンさん(59)は胸を張る。「原子力発電所を1カ所につくるか、それとも各地のたくさんの方から小さな自然エネルギーを集めるのか。ロ

原発から転換 官民後押し

が広がり、反対の声が大勢に。85年、政府は原発に頼らないエネルギー政策に切り替えた。ロラン島でも2カ所が原発建設予定地に指定されていたが、住民は反対。代わりに彼らが着目したのは、島を吹き抜ける風だった。市民が農地を担保に銀行から多額の資金を借り、風車を建設する輪が80年代から広がっていった。



島のドックに設置されている波力発電機「ポセイドン」



ポセイドンについて説明するクリステンセンさんと北村さん

全電力「風」が生み出す

ロラン島の挑戦①

ランは自然エネルギーを選び、地域を活性化したいんです」

住民が風車所有

北欧の小国デンマークは、日本と同様に資源に乏しい。1970年代、政府は原子力発電を導入する方針を打ち出した。しかし、市民運動で原発のリスクについての認識

の動きを後押しした」と説明する。スムーズな融資、電力の全量買い取り制度、風車建設費用の補助制度をてこに、島内の風車の半数は住民が個人で所有している。

復興のヒントに

このロラン島の試みは、日本の復興のヒントになるのではないかと。昨年3月11日の東日本大震災、そして福島第1原発事故に衝撃を受けた北村さんは思いを強めた。

クリステンセンさんとともに来日を重ね、今月も26日まで8日間、被災地

その一つが、波力と風力を組み合わせた海上の発電機「ポセイドン」の実証実験だ。風車の土台部分を海に浮かせて波を受け、それも電力に変える取り組みだ。

デンマークの東南にあるロラン島。庄原市ほどの面積に風車が290基ある

に囲まれている。こういった技術が生かせる場所も多いはずだ」

(平井敦子)



〈電気料金〉

デンマークの電気料金は日本のおよそ1.5倍。そのうち半分以上は消費税(25%)を含めた税金で、再生可能エネルギーの利用促進などのために使われている。電力自由化により、電力会社は住民が自由に選択できる。選ぶ会社によっても料金が異なる。再生可能エネルギーしか買わない人もいるという。

「もっと安く」との声はないのか、北村さんに聞くと「高い分、節電してできるだけ電気を使わないようにすればいいという考え方が強い。そういう意味から水道料金も高く設定してあるんですよ」





デンマークの環境

タンクの水は深緑色に染まっていた。中で培養されているのは藻だ。2年前に設置されたデンマーク・ロラン島の藻イノベーションセンター。エネルギー源などに活用するための研究を重ねている。

センターを案内してくれたロラン市の市議レオ・クリステンセンさん(59)は、水中で育つ生物資源「ブルーバイオマス」に大きな期待を抱く。「木材など陸上のバイオマスに比べて育つスピードがはるかに速く、10〜12倍の量をつくることができると説明する。

藻は燃料にするだけでなく、燃やさず一定の処理を施してメタンガスや二酸化炭素、タンパク質やリンなどを取り出し、エネルギー資源や医薬品に利用できるという。

雇用創出に貢献
ロラン島では海に流れ出す運河に堤防を建設し、堤防の内側160センチで8万トンの藻を生み出すなどの壮大な計画を進める。「広島の力キなど、日本は養殖の経験が豊富。海水で藻を培養できれば新たな産業が生まれますよ」とクリステン

センさん。地域全体を「エネルギー・ラボ(研究所)」に。ロラン島では行政と大企業が手を携え、野心的な技術開発を続ける。グリーン社会をつくることにとまらぬ。雇用の創出も目標の一つだ。1999年に22%だったロラン市の失業率は8年後に2.8%へ。クリステンセンさんは「よい投資をすれば、雇用も多くなり出す」と強調する。住民たちも協力している。現在進行しているのは、水素を使った燃料電池を家庭で活用する実証実験だ。

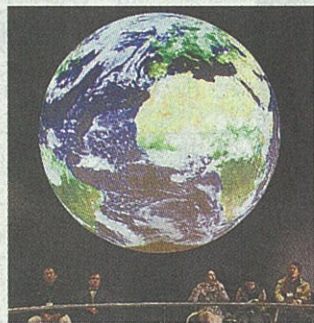
ロラン島の挑戦②

藻バイオマス・燃料電池…

エネ「開発」地域ぐるみ

<ビジュアル気候センター>

ロラン市にあるビジュアル気候センターには、世界に82個だけという巨大な地球儀=写真=が据えてある。米



航空宇宙局(NASA)の研究所に集まるデータを、地球儀上に映し出す。北極の水が解けて今後100年で海面がどのくらい上昇するのか、世界でどのくらい電気が使われているか…。福島第1原発事故で放射性セシウムが世界にどう拡散したかもひと目で分かる。グリーン社会をつくり出す必要性を考えてもらうのが目的だ。

応させて水をつくる装置を設置。その過程でできる電気と熱を家庭で利用

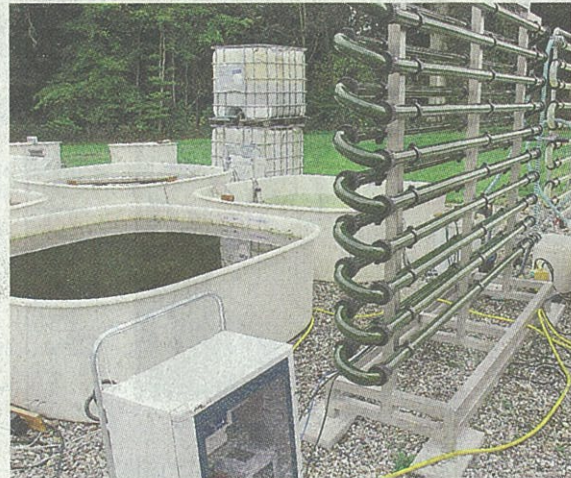
今は35軒が実験に参加。試みはデンマーク政府も後押しし、2年後に1万軒の家庭での実用化を目指しているという。**教育子どもから**

住民の理解をどう促しているのだろうか。広島から視察に訪れた参加者も興味を募らせた。

視察団が案内されたのは「Hインタラクション」。水素の活用など、自然エネルギーについて子どもから学べる体験型の施設だ。

中央にあるカラフルな模型は、風力や太陽光や波力、水素による電力が

ロラン市の藻イノベーションセンターとブルーバイオマスの活用法を研究している



「小さな島が、地方が、未来をリードしていく時代です」(平井敦子)

デンマークは昨年、新たなエネルギー政策打ち出した。現在2割の再生可能エネルギーを、2020年までに5割、50年までに100%にする目標を掲げる。クリステンセンさんは熱く語る。

安心・安全

結ぶプロジェクト



デンマークの環境

「そこは危ないよ」と注意され、何のことかと思つたら「自転車道」を歩いていたらしい。歩道によけると自転車がいすい通り過ぎていく。

車道の間につくった自転車道の全長は510キロに及ぶ。



人口19万人のオーデンセ市は、デンマーク第3の都市。童話作家アンデルセンの生誕地としても知られる。れんが造りの建物が連なる美しい街並みとともに、目を引くのは自転車の多さだ。

市は自転車で走りやすいよう、街中にさまざま

な工夫を凝らす。歩道と

専用道510キロすいすい

電光掲示板で速度表示も



困ったらどうぞ。街中のボックスは自転車の空気入れ

板が立っている。自転車に邪魔されず目的地を目標にする。繁華街でも店舗や銀行の前、無料の駐輪スペースが目立つ。レンタルの自転車もあちこちで利用を誘う。街角の小ヤがパンクして困ったと

この表示を参考に一定の空気入れ。誰でも自由にその頃からで、デンマーク

でも先進地だ。2010年の上海万博にも自転車都市として出展。市は、中心部への自動車の乗り入れ制限や路面電車の整備も検討。環境にやさしい街を目指す。

子どもたちは幼いころから、風を切る楽しみを知りようだ。自転車の前にベビーカーのシートを付けたような三輪車をよく見掛けた。安定感抜群。親子でゆったり走り、気持ちよさそうだった。(平井敦子)

連載「らしく暮らす」は終わります。



自転車の街オーデンセ



親子らしくらく

ママは子どもを乗せた三輪車で風を切る



レンタルいかが

多くのレンタル用自転車を利用を誘う

スピードは…

あなたのスピードは時速16キロ。歩道と車道の間を走る自転車道では、電光掲示板が速度を示す